

## チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解

——「歴史について」——

平 野 順 雄\*

An Essay on Charles Olson's "On History" in *Muthologos*

Yorio HIRANO

チャールズ・オルソン (Charles Olson, 1910–70) 著『ミュソロゴス』(*Muthologos*, 1979) は、1963年から1968年の間にオルソンが行なったシンポジウムや、講演、座談、インタビューなどを集めた多様なテキストの集合である。本稿の目的は、『ミュソロゴス』の劈頭を飾る「歴史について」(“On History”) の主要な意味を明らかにするとともに、それが『マクシマス詩篇』との関連において、どのような意味をもつテキストであるのかを考察することである。

### キーワード

チャールズ・オルソン	Charles Olson
ブラック・マウンテン派詩人	Black Mountain Poets
『ミュソロゴス』	<i>Muthologos</i>
「歴史について」	“On History”
ヴァンクーヴァー・ポエトリー・カンファレンス	Vancouver Poetry Conference

## I. シンポジウム「歴史について」

### 1. シンポジウムの状況

「歴史について」のテキストは、1963年7月29日にブリティッシュ・コロンビア大学で開催されたシンポジウムの録音テープを文字に起こしたものである。オルソンが加わったこのシンポジウムのパネリストはすべて詩人で、ロバート・クリーリー (Robert Creeley)、ロバート・ダンカン (Robert Duncan)、アレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg)、フィリップ・ホエーレン (Philip Whalen) とチャールズ・オルソンによって構成されていた。

まず、テキストの特徴を指摘しておきたい。シンポジウムとはいえ、それぞれの講師が自分の考えを一通り述べた後に、フロアにいる聴衆を交えて討論を進めるという形にはなっていない。長々と自説を展開する講師もあれば、あまり話すことなくほとんど聞き役

---

\* 人間関係学部 人間関係学科

に回る講師もいるといった具合で、持ち時間の平等は保たれていない。長々と自説を展開する講師がオルソンであり、ほとんど話さず聞き役に回る講師は、ギンズバーグとホエーレンの二人である。残る二人はどうかというと、クリーリーは議論を正しい方向に持っていこうと努力し、ダンカンがオルソンの説を補足しながら自説を語っている。

つまり、もっとも強力に押し出されるのはオルソンの歴史観で、それに対する他の講師と聴衆の反応から「歴史について」は成り立っていると言ってよい。シンポジウムは改訂第二版『ミュソロゴス』の編者ラルフ・モード (Ralph Maud) によれば、「オルソンの独壇場」(“Olson’s moment” 45) になった。それにはオルソンが1962年1月に書き、*Yūgen* 8に発表した自作の詩「場所、そして名前」(“Place; & Names”) を用いて、論点を明らかにしたことが貢献している。「場所、そして名前」は、シンポジウムを始めるに際してオルソンがまず全体を朗読し、次いでシンポジウムを閉じるときに今一度、詩をいくつかの塊に分割し、それぞれに解説を加えながら、オルソンが囁んで含めるように朗読したものである。その詩はどのようなものであったのだろうか。以下、原詩に拙訳を付した上で内容を検討する。議論をする際の便宜のため原詩と訳文に行数を入れた。

## 2. 朗読された詩「場所、そして名前」

a place as term in the order of creation  
 & thus useful as a function of that equation  
 example, that the “Place Where the Horse-Sacrificers Go”  
 of the Brihadaranyaka Upanishad is worth more than  
 a metropolis—or, for that matter, any moral 5  
 concept, even a metaphysical one  
 and that this is so  
 for physical & experiential reasons of  
 the  
 (which is the only thing I don’t like in this thing) 10  
 the *philosophia perennis*, or Isness  
 of cosmos beyond those philosophies  
 or religious or moral systems of  
 rule, thus giving factors of naming  
 —nominative power—& lands haft<sup>1)</sup> 15  
 experience (geography) which stay truer  
 to space-time than personalities  
 or biographies of such terms as specific  
 cities or persons, as well as the inadequacy  
 to the order of creation of anything except 20  
 names—including possibly mathematics (?)  
 the crucialness being that these places or names  
 be as parts of the body, common, & capable

therefore of having cells which can decant	
total experience—no selection	25
other than one which is capable	
of this commonness (permanently	
duplicating) will work	
“Story” in other words is if not superior	
at least equal to ultimate mathematical	30
language—perhaps superior because of	
cell-ness (?) In any case history	
(as to be understood by Duncan’s Law	
to mean a) histology & b) story)	
applies here, in this equational way	35
& severely at the complementarity of	
cosmos (complementary to individual	
or private) and not to cities or	
events in the way it has, in	
a mistaken secondary way, been	40
understood	(Muthologos, Vol. I. 1-2)
一つの場所は創造の秩序のなかの言葉として	
ゆえに、その方程式の関数として有用である	
例を見よう。プリハドアーラニヤカ・ウパニシャッドの	
「馬を犠牲にささげる者たちが行く場所」は、	
国の首都より価値がある——すなわち、その点では、どんな	5
道徳的観念にも、形而上学的観念にさえ勝る価値がある	
そして、事情は同じなのだ	
物理的で経験的な理由によって	
あの	
(この作品の中で唯一気に入らないのは、この詩句だ)	10
もろもろの哲学を超えた宇宙 <sup>コスモス</sup> の	
永遠 <sup>ピロソピア・ペレンニス</sup> の哲学、すなわち存在 <sup>イズネス</sup>	
それは、宗教的あるいは道徳的な掟の体系さえ	
超えている、だから名前をつける因子を与えるのだ	
——命名する力を——それに、風景	15
体験（地理）を。これらは時空世界 <sup>2)</sup> に	
忠実である、人格とか	
伝記よりも。伝記は、特定の都市や人を表わす	
言葉によって成り立っており、やはり不十分なのだ	
名前以外のどんなものの創造の秩序をも表せば	20

しないから——ひょっとすると数学は別だろうか（？）

決定的なのは、これらの場所や名前が  
身体の一部であることだ、ありきたりで、それゆえ  
経験の全体を注ぎ込む細胞を  
持つことができることだ——選択などしない 25  
選択が行われるとすれば、ありきたりでありうるか  
どうかだけである（永遠に  
複製を作って行く）それが役に立つのだ

換言すれば、「物語」は究極的な数学言語に  
勝ってはいなくとも、少なくとも劣らない 30  
ものだ——ことによると勝っているなら  
細胞があるからだ（？） ともかく歴史  
（ダンカンの法則によって理解されるような歴史の  
意味は a) 組織学<sup>ヒストロジー</sup><sup>3)</sup>でありまた b) 物語である）  
がここで適用できる、この方程式において 35  
それに宇宙の補完性において  
厳格に（個人的なことや私的なことに対して  
補完的で）行く手にある都市や出来事に対しては  
補完的ではない、このことは間違った二次的な仕方  
で誤解されてきた 40

この詩が理解できれば、シンポジウムでオルソンが主張している「歴史」の意味がかなりの程度まで明らかになると考えられる。この詩は意味の単位ごとに分割されて、もう一度朗読される。二度目に朗読される時の分割方式（*Muthologos* Vol. I. 16-18）を参考にして、詩の読解を試みる。その際、日本語訳を挙げ、必要に応じてオルソンを含むパネリストの意見その他を参考にする。

①1-6行目

一つの場所は創造の秩序のなかの言葉として  
ゆえに、その方程式の関数として役に立つ  
例を見よう。ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッドの  
「馬を犠牲にささげる者たちが行く場所」は、  
国の首都より価値がある——すなわち、その点では、どんな 5  
道徳的観念にも、形而上学的観念にさえ勝る価値がある

「場所、そして名前」（“Place; & Names”）という詩は、場所と名前の定義である。1行目から2行目では、「場所は創造の秩序のなかの言葉として役に立つ」とされている。「場所」は「言葉」であって、「創造の秩序のなか」にある。これが第一の定義である。空間

(場所)と言語(言葉)を「創造の秩序」のなかでは同じ働きをするものと考えるところに、この定義の特徴がある。

3行目から4行目に挙げられるブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッドの「馬を犠牲にささげる者たちが行く場所」については、湯田豊(『ウパニシャッド—翻訳および解説—』大東出版、2000年)、中村元(『ウパニシャッドの思想』春秋社、1990年)を参照しても、それほど明らかにはならない。湯田は「馬祀祭」について「人々はプラジャーパティに属する馬を一切の神々に捧げられたものとして屠殺する」(10)と説明するが、その儀式を行なう場所については記述していない。中村は、「われわれの身体の内部に存する生氣(prāṇa, 単数)が、われわれの生存の根本」だという考えを紹介し、この「生氣」が「犠牲獣の幼獣」(102)にたとえられるのだと説明する。中村は、祭儀において犠牲にされる幼獣とその住処などを以下のように述べるが、幼獣に近侍する「七つの不滅なるもの」を説明し始めると、幼獣を犠牲にする場所がどこなのかは分かりにくくなる。以下が中村による当該箇所の叙述である。

この犠牲のための幼獣を、その住処、その小舎、その繋がれる杭および縄とともに知る者は、敵対する七人の敵を駆逐する。じつに、この幼獣とはこの中央の生氣であり、これ(=身体)はその住処であり、これ(=頭)はその小舎であり、生氣はそれを繋ぐ杭、食物はその縄である。

この幼獣に、これら七つの不滅なるものが近侍して奉仕する。すなわち、眼のなかに七つの赤い線があるが、これらによってルドラ(暴風雨)神がかれと結びついている。また、眼のなかにある水によってパルジャニヤ(雨)神がかれと結びついている。[眼のなかの]瞳子<sup>ひとみ</sup>によってアーディティヤ(太陽)神がかれと結びついている。眼の黒い部分によってアグニ神がかれと結びつき、白い部分によってインドラ神がかれと結びついている。下<sup>しも</sup>瞼<sup>まぶた</sup>の睫毛<sup>まつげ</sup>によって大地がかれと結びつき、上瞼の睫毛によって天がかれと結びついている。このように知る者に、食物が尽きることはない。(ブリハドアーラニヤ・ウパニシャッド、II, 2, 1-2) (中村 102)

まず、第一段落の意味が分かりやすいとは言えない。さらに、第二段落で言及されるルドラ(暴風雨)神、パルジャニヤ(雨)神、アーディティヤ(太陽)神、アグニ神、インドラ神を眼の中に宿す幼獣を犠牲に捧げることの意味についても、解説が欲しいところである。中村の叙述は根本的な事柄に関する深い洞察を示しているが、幼獣を犠牲にする「場所」については、何の手がかりも与えない。

ラルフ・モードは、改訂第二版『ミュソロゴス』の「歴史について」に付した簡便な序文のなかで、「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」の典拠を明らかにしている(45)。ユング著『変容の象徴』(C. G. Jung, *Symbols of Transformation*, 1952)である。モードの序文に拙訳を付すと以下ようになる。

The one place mentioned, the “Place Where the Horse-Sacrificers Go,” shows the extraordinary dimension Olson is giving to the immediate. It is the “horizon where the sky and the sea meet, between the two shells of the world egg” and there is union with Brahman at the

back of the sky, through a gap “as broad as the edge of a razor.” This comes from Jung’s *Symbols of Transformation* (p. 422).

語られている「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」は、オルソンが直接のものに与える途方もない次元を表わしている。そこは、「空と海が出会う水平線であり、世界卵の二つの殻の間」であって、空の背後ではブラフマンとの合体が行われており、「剃刀の刃ほどの」隙間からそれが見える。この典拠は、ユング著『象徴と変容』(422頁)である。

モードによる序文は、「オルソンが直接のものに与える途方もない次元」を示唆するが、「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」の十分な説明にはなっていない。ユング著『象徴と変容』(4th edition, 1952)の該当頁(422頁)を見よう。以下に挙げるのは、R. F. C. ハル(R. F. C. Hull)による、ユング著『象徴と変容』の英訳(1967)である。

“And where, pray, do the offerers of the horse sacrifice go?”

“This inhabited world is as broad as thirty-two days’ journeys of the sun-god’s chariot. The earth, which is twice as broad, surrounds it on all sides. The ocean, which is twice as broad, surrounds the earth on all sides. There is a gap as broad as the edge of a razor or the wing of a mosquito. Indra, taking the form of a falcon, delivered the Parikshitas to the wind, and the wind took them and bore them to the place where the offerers of the horse sacrifice were ...

“Therefore the wind is the most individual thing (*uyashti*) and the most universal (*samashti*). He who knows this wards off repeated death.” (Trans. by Robert Ernest Hume, modified.)

「お願いだ、馬を犠牲に捧げる者たちが行くのはどこか教えてくれ」

「人が住むこの世界は、太陽神の馬車が32日間の旅をするほど広い。大地は、その2倍の広さがあって、世界の四方を取り囲んでいる。大洋は、大地の2倍の広さがあって、大地の四方を取り囲んでいる。剃刀の刃あるいは蚊の羽根ほどの隙間がある。雷雨を司る神インドラは、ハヤブサの姿をとってパルクシタス (the Parikshitas) を風に渡した。すると風はパルクスタスを受け取り、馬を犠牲に捧げる者たちのいる場所へ運んで行った……

「したがって、風はもっとも個人的なもの(ウヤシュティ)であるとともに、もっとも普遍的なもの(サマシュティ)である。これを知る者は繰り返される死を撃退することができる。」(ロバート・アーネスト・ヒュームによる英訳を修正した)

ロバート・アーネスト・ヒュームによる英訳とは、Robert Ernest Hume (trans.). *The Thirteen Principal Upanishads* (Oxford, 1921)を指す。これを参考にしながら、ハルは『象徴と変容』に引用されたウパニシャッドを英訳したということである。

さて、ここまで見てくると、はっきりとは語られていないけれども分かることがある。それは、「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」は、この世ではないらしいということである。ハルによるユング訳をもう少し追っておこう(422)。

As the text says, the offerers of the horse-sacrifice go to that narrowest of gaps between the

shells of the world-egg, the point where they are at once united and divided. Indra, who in the form of a falcon has stolen the soma (the treasure hard to attain), is the psychopomp who delivers the souls to the wind, to the generating pneuma, the individual and universal *prana* (life-breath), to save them from “repeated death.”

原典が語るところによれば、馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所は、世界卵の卵殻と卵殻の間にあるこの上なく狭い隙間である。そこは、馬を犠牲にする者たちが結合されると同時に分割される場所である。インドラは、ハヤブサの姿をとってソーマ（入手しがたい宝）を盗んだ。インドラは靈魂を冥界に導く神で、靈魂を風に渡す。生み出すプネウマ、すなわち個別でありながら普遍的なプラーナ（生命の息）に靈魂を渡すのである。それは靈魂を「繰り返される死」から救うためである。

「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」は、この世の果てにある狭い隙間であることが、一つ目の文で明らかになる。だが、一つ目の文と二つ目の文はどのように結びつくのだろうか。二つ目の文によれば、インドラは既にソーマ（入手しがたい宝）を盗んでおり、靈魂を風に渡す。風は生み出すプネウマであり、靈魂を死から守る。一つ目の文と二つ目の文には断絶があるように思えるのだが、あえて断絶を超えるなら、以下のような読解ができるだろう。「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」はこの世の果てであるが、彼らは、そこで結合されると同時に分割されて、「繰り返される死」を撃退できるようになる。

分かりやすい話ではないが、「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」についての考察は、これまでにとどめ、朗読された詩「場所、そして名前」の解釈に戻ることにしよう。5行目から6行目では、この場所が、

国の首都より価値がある——すなわち、その点では、どんな 5  
道徳的観念にも、形而上学的観念にさえ勝る価値がある

とされている。その内容は、「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」について考察を進めてきたわれわれには、異論なく受け入れられるものである。馬を犠牲に捧げる者たちは、この世の果てまで赴いて、結合と分割の試練を受けた結果、死から免れるようになるのだから、その場所が政治的中心地（すなわち政治的権力）や諸観念（観念の力）に「勝る価値がある」ことは、自明であると考えられるからだ。

「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」が言及されるのは、場所の重要性を示す例としてであったことを思い出そう。

一つの場所は創造の秩序のなかの言葉として  
ゆえに、その方程式の関数として役に立つ

冒頭の二行は、こう書かれていたのである。その意味をここで問い直してみる。「場所」は、「創造の秩序」のなかの「言葉」として役に立つという文の意味は、「場所」は「創造の秩序」のなかの「言葉」として機能するから役に立つ、なのではないか。すなわち、創造の秩序において、「場所」は空間ではなく、「言葉」（名前）として役に立つのである。



②7-21行

そして、事情は同じなのだ  
物理的で経験的な理由によって  
あの  
(この作品の中で唯一気に入らないのは、この詩句だ) 10  
もろもろの哲学を超えた宇宙の  
永遠の哲学、すなわち存在  
それは、宗教的あるいは道徳的な掟の体系さえ  
超えている、だから名前をつける因子を与えるのだ  
——命名する力を——それに、風景 15  
体験（地理）を。これらは時空世界に  
忠実である、人格とか  
伝記よりも。伝記は、特定の都市や人を表わす  
言葉によって成り立っており、やはり不十分なのだ  
名前以外のどんなものの創造の秩序をも表せは 20  
しないから——ひょっとすると数学は別だろうか（？）

「事情は同じなのだ」（7行目）は、「もろもろの哲学を超えた宇宙の／永遠の哲学、すなわち存在」（11-12行）も、「場所」が「言葉」として機能するからこそ役立つという点では、①で述べた内容と「事情は同じだ」という意味である。ただし、10行目の括弧内のセリフは、オルソンがこの詩をシンポジウム会場で朗読する際に発したつぶやきであるから、われわれが読み解いている詩とはレベルが異なると考えなければならない。果たして、二度目の朗読の際にオルソンは、「気に入らない」詩句を切り捨てている（17）。9行目の「あの」から11行目の「永遠の哲学、すなわち存在」を削除したのだ。その結果を原詩とともに記すと以下ようになる。

and that this is so  
for physical & experiential reasons  
of cosmos beyond those philosophies  
or religious or moral systems of  
rule, thus giving factors of naming  
そして、事情は同じなのだ  
物理的で経験的な理由によって  
それは、もろもろの哲学を超えた宇宙の理由だ  
宇宙は、宗教的あるいは道徳的な掟の体系さえ  
超えている、だから名前をつける因子を与えるのだ

オルソンが嫌ったのは「永遠の哲学、すなわち存在」の“the philosophia penrennis”という哲学的ラテン語の学術的な響きや、哲学では許されるが通常は用いられない“Isness”という造語であったと思われる。



「場所、そして名前」の読解に戻ろう。9行目から11行目までが削除された結果、「もろもろの哲学を超えた宇宙<sup>コスモス</sup>」(“of cosmos beyond those philosophies”)は、11行目の「永遠<sup>ピロソピア・ベレンニス</sup>の哲学、すなわち存在<sup>イズニス</sup>」ではなく、9行目の「物理的で経験的理由によって」(“for physical & experiential reason of”)に続くことになる。それを明確になるよう訳出したのが上の私訳である。

内容的には、ここでも、「宇宙<sup>コスモス</sup>」という場所が、「名前をつける因子を与える」とされており、①で見た「場所」と「言葉」の主題が連続していることが分かる。しかし、「名前をつける因子を与える」は、ぎこちない訳であるばかりか、何に名前を与えるのが明確ではない。それを考えるためには、②節の後半15行目から21行目を検討しなければならぬ。文の主語が分かりやすいように、便宜上13行目から21行目までを以下に挙げる。

宇宙<sup>コスモス</sup>は、宗教的あるいは道徳的な掟の体系さえ  
 超えている、だから名前をつける因子を与えるのだ  
 ——命名する力を——それに、風景 15  
 体験(地理)を。これらは時空世界に  
 忠実である、人格とか  
 伝記よりも。伝記は、特定の都市や人を表わす  
 言葉によって成り立っており、やはり不十分なのだ  
 名前以外のどんなものの創造の秩序をも表せは 20  
 しないから——ひょっとすると数学は別だろうか(?)

13行目から16行目をまず見ておこう。「宇宙<sup>コスモス</sup>」が、人間の作った掟を超えているという点は容易に理解できるが、その後の「名前をつける因子を与えるのだ／——命名する力を——」(14-15行)は、理解しにくい点を二つ含んでいる。その第一は、誰に「命名する力」を与えるのかであり、第二は、なぜ「命名する力」を特に問題にするのかである。第一の点については、「人間に与える」と考えておく。第二の点については、この詩「場所、そして名前」の主題の一つが命名であり、名前であることと関係があるので、「命名する力」を問題にしていると考えておくことができる。

15行目から16行目で、「宇宙<sup>コスモス</sup>」が人間に与えるのは、「命名する力」(“nominative power”)と「風景／体験(地理)」(“landschaft / experience (geography)”)の二つであるとされる。そして、この二つは、四次元の時空世界に忠実であると書かれている(17行)。以下17行から21行までに書かれているのは、「人格」(“personalities”)や「伝記」(“biographies”)は、「命名する力」や「風景／体験(地理)」に比べると、「時空世界」に対する忠実度が落ちるという内容である。伝記は「特定の都市や人を表わす／言葉によって成り立っている」から「不十分」(18-19行)で、「名前以外のどんな創造の秩序をも表わせは／しない」(20-21行)。ならば、伝記の中で描き出される「人格」も「創造の秩序」を表わせはしないだろう。

しかし、①では言葉にたいして、重要な意味が与えられていたことを思い出さなければならない。

冒頭行は以下のものであった。

一つの場所は創造の秩序のなかの言葉として  
ゆえに、その方程式の関数として役に立つ

言葉としての役割を果たすだけの言葉は、重要性をさほど認められていなかったことが分かる。すなわち、「場所」が「創造の秩序」のなかの「言葉」として「役に立つ」時に「場所」が重要な意味を持つようになるのであり、その例としてウパニシャッドの「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」が挙げられていたのである。そこには、「名前以外の創造の秩序」が表わされていた。すなわち、「伝記」や「人格」には望めないものがウパニシャッドにはあったのだ。

③22-28行

決定的なのは、これらの場所や名前が  
身体の一部であることだ、ありきたりで、それゆえ  
経験の全体を注ぎ込む細胞を  
持つことができることだ——選択などしない 25  
選択が行われるとすれば、ありきたりでありうるか  
どうかだけである（永遠に  
複製を作っていく）それが役に立つのだ

この箇所についてオルソン自身は『ミュソロゴス』第一巻の中で次のように語っている。

I'm just trying to get that commonness reduced to the very exciting truth that we are also simply duplications at the same time that we are this utter, utter particularity that nobody is going to take away from us. (17)

私は、ありきたりであることを胸の踊るような真実に還元しようとしている。すなわち、われわれは単なる複製であるとともに、まったくの、まったくの特殊性であるため、誰も私たちから特殊性を奪おうとはしないという真実に。

オルソンの解説は、われわれの誰もが複製で、ありきたりの者でありながら、特殊性を有しているという逆説を語っている。分かりやすい逆説ではないが、ありふれた人間の中にも決定的な違いはあるという意味であろう。すなわち、複製はオリジナルではないが、複製と複製の間には、違いがある。同じ複製はないのである。

③の内容は上述のオルソンの解説によって明らかになるのだが、22-23行はどう考えたらよいのだろうか。「これらの場所や名前」（“these places or names”）とは何を指すのか。②に見られた2行、すなわち

伝記は、特定の都市や人を表わす  
言葉によって成り立っており (18-19行)

への言及だと考えると、「場所」＝「特定の都市」、「名前」＝「人を表わす／言葉」となる

が、それで良いのかどうか判断しがたい。疑念を抱く理由は、「特定の都市」も「人を表わす／言葉」も、「名前以外のどんなものの創造の秩序をも表せは／しない」(20-21行)次元の低い言葉の例として挙げられていたからである。創造性を欠く言葉が「身体の一部」であり(23行)、「経験の全体を注ぎ込む細胞」を持つ(24-25行)と考えてよいのだろうか。

そうであるならば、「場所」は②の「風景／体験(地理)」(15-16行)を指し、「名前」は、「名前をつける因子」「命名する力」(14-15行)を指すと考えてよいだろう。しかし、人間の根源的体験を意義深いものだと考えるなら、「名前」も「場所」も「創造の秩序」と関係する次元の高いものでなければならない。

だが、詩にはどちらとも特定されていない。そして、ここはありきたりであることの可能性を探っている箇所なのだから、次元の低い言葉の例と取っても悪くはないのである。だとすれば、「これらの場所や名前」は、人間の根源的体験を指す次元の高いものである可能性を捨てることなく、次元の低い言葉の例を指すと考えるのが妥当であると思われる。人間の根源的体験が次元の低いものに引き下げられたのではなく、ありきたりの複製でしかない人間の存在が、次元の高いものとの関係において定位されたと考えべきである。最後の箇所に進もう。

#### ④29-40行

換言すれば、「物語」は究極的な数学言語に  
 勝つてはいなくとも、少なくとも劣らない 30  
 ものだ——ことによると勝っているなら  
 細胞があるからだ(?) ともかく歴史  
 (ダンカンの法則によって理解されるような歴史の  
 意味は a) 組織学<sup>ヒストロジー</sup> でありまた b) 物語である)  
 がここで適用できる、この方程式において 35  
 それに宇宙の補完性において  
 厳格に(個人的なことや私的なことに対して  
 補完的で)行く手にある都市や出来事に対しては  
 補完的ではない、このことは間違った二次的な仕方  
 で誤解されてきた 40

前半29-35行は、「物語」を基軸にして話が展開している。そして、「ダンカンの法則」(“Duncan’s Law”)を引き合いに出しながら(33行)、「歴史」の二つの意味(a)組織学(“histology”) (b) 物語(“story”)のうち、後者の「物語」の方が重要なのだと主張している。「ダンカンの法則」は仲間内で通じる冗談である。

オルソンの盟友でブラック・マウンテン大学の同僚であったロバート・ダンカンの考え方を援用して、時系列に基づく一般的な歴史に対する物語の優位を語っているのだ。

後半36-40行は、宇宙の補完性に焦点が当てられている。「個人的なことや私的なことに対しては／補完的で」、「行く手にある都市や出来事に対しては／補完的でない」宇宙の補完性は、一個人にとっては救いとなる。

オルソン自身が、『ミュソロゴス』の中で、「意味は分からないが、書いた時、いい気分になった」(“I don’t know what that means. It sure felt good when I wrote it.”)と言っているのは(18)、「宇宙の補完性」が個人にとって救いとなるためだろう。

さて、われわれは32行目の「細胞があるからだ」に注目しなければならない。というのは、③で語られていた人間の体細胞の働きを思い出させるために、「細胞」という語が配されていると考えられるからだ。③22-28行には、こう書かれていた。

決定的なのは、これらの場所や名前が  
身体の一部であることだ、ありきたりで、それゆえ  
経験の全体を注ぎ込む細胞を  
持つことができることだ——選択などしない 25  
選択が行われるとすれば、ありきたりでありうるか  
どうかだけである(永遠に  
複製を作って行く)それが役に立つのだ

詩のタイトル「場所、そして名前」(“Place; & Names”)そのものである「場所や名前」(“these places or names”)が身体の一部となり、経験の全体を入れることのできるような、ありきたりの細胞を持つと、この箇所は語っている。「場所」と「名前」は、「経験」を「身体」に刻み込む。そして、「選択」せずにすべてを受け入れる細胞が「永遠に／複製を作って行く」なら、個人の経験は反復され、永遠化される。「それが役に立つ」(28行目)のは、続く29-32行で見たとおり、「物語」が永遠に続くからだ。

「物語」は、個人の体細胞の中に「場所」や「名前」の経験として保存され、複製を作りながら永遠化していくものなのだ。それは、「歴史」と同義である。すなわち、「歴史」とは個人の体細胞の中に「創造の秩序」に従って記憶された「場所」と「名前」の「経験」なのである。朗読された詩から分かるのは以上のことである。

われわれが、「歴史」と「物語」について、このような結論に達することが出来たのは、オルソンが朗読した詩「場所、そして名前」をパネリストや聴衆の反応に妨げられることなく、十分に時間をかけて読解できたからである。しかし、実際のところ「場所、そして名前」というテキストが、オルソン以外のパネリストと聴衆にどれほど理解されたかは疑問である。「場所、そして名前」をテキストに用いてなされたシンポジウムであったが、朗読を聞いた人たちの理解の程度はもはや、測ることができない。オルソン以外のパネリストたちと聴衆の反応を見ておこう。「場所、そして名前」はどのように受容されたのだろうか。

## II. 「場所、そして名前」に対する反応

1963年7月末に行なわれたシンポジウム「歴史について」にオルソンは、1962年1月初旬に書いた詩「場所、そして名前」を携えて臨んだ。オルソンの意気込みとその成果について、ラルフ・モードは、自らが編集した改訂第二版『ミュソロゴス』のなかで、クリーリー、ダンカン、ギンズバーグ、ホエーレンなどの著名な詩人を挙げた後でこう語る。

but this was Olson's moment, and his intension was clearly to found the summer community from the start on the principle of immediacy: it is present facts that are the reality, and history is only what you can bring into the room from the past that is meaningful to yourself and can be made useful to others. (45)

しかし、この時はオルソンの独壇場だった。彼の意図は明らかに初めから直接性の原理に基づいた夏のコミュニティを造ることだった。現実とは、現在の事実であり、歴史とは過去から部屋の中へ持ってくるものにすぎないのだ。自分自身の役に立つ過去なら、他人の役に立つこともあるからだ。

引用の1行目から2行目にかけてモードが解説していることは間違いないように思える。しかし、「歴史」の捉え方は平板である。われわれが詩「場所、そして名前」を読解して学んだ「歴史」は、モードが言うような過去の物ではなく、現在にまで連綿と続く人間の体験の歴史なのである。「場所、あるいは名前」は、モードにも解説が困難であるほど難解な詩であることは、われわれにはよく分かる。

バタリックが編集した『ミュソロゴス』第一巻の初版は1978年である。その時から32年後の2010年にモードは、バタリック編の『ミュソロゴス』第二巻(1979)とともに一卷本として改訂第二版『ミュソロゴス』を出版した。極めて有利な地点にいるモードでさえ、詩「場所、そして名前」に込められた「歴史」の意味を把握できなかったのだとすれば、シンポジウム当日に、オルソン以外のパネリストや聴衆が、「歴史」の意味や、詩「場所、そして名前」の意義を捉えきれなかったとしても無理はない。

ギンズバーグの言動には、「歴史」の意味や詩「場所、そして名前」の意義を捉えることに失敗した節が見える。詩の朗読を聞いた直後に『ミュソロゴス』第一巻でギンズバーグは言う、「一体全体何を言ってるんだ? そもそも、ダンカンの法則とは何のことだ?」(“What's that all about? First of all, what's Duncan's Law?” *Muthologos* I, 2).

ホエーレンは「歴史」の意味を理解しはじめたようだ。ホエーレンは言う、「それを聞いてガートルード・スタインを思い出したよ。『いつの日か、今生きている人それぞれの歴史が出来るでしょうと言っていた』——どうだい?」(“Well, that reminds me about Gertrude Stein, about ‘Some day there will be a history of each one who is now living’—how does that go?” 12)。

クリーリーとダンカンと共にオルソンの盟友であり、ブラック・マウンテン大学の同僚でもあったから、オルソンの朗読する詩「場所、そして名前」や、「歴史」についての考えを十分に理解しているようだ。ダンカンと言う。「エリオット (T. S. Eliot) の『荒地』には、どんな歴史もない。(中略) 姦通の物語を語ることにかまけており、悲痛なので仮面で覆っている。(中略) エリオットは銀行に勤めており、妻は色情狂じみているので……彼は仮面をかぶる。芝居なのだ。その正体は、下手な芝居だが、下手な芝居は歴史ではない」(“I don't think there's any history in *The Waste Land*. [...] It was concerned with telling the story of adultery, and masking it because it was painful [...] he's working at the bank, and his wife, who is a nymphomaniac, is ... And he can wear the mask: it's a play; it's a charade is what it is, and a charade is not history”) という意見を述べる (10)。クリーリーは、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ (William Carlos Williams, 1883-1963) が『パタソン』 (*Paterson*,

1958) を作成しながら、どのようなジレンマに陥ったのかをこう評している。「彼は、都市を造ろうとしていた。そして組織学に巻き込まれてしまった。見ることも先に、観念に捕われてしまったのだ」(“He was trying to make a city. He was involved with histology, but then he’d get involved with concepts prior to looking.” 4) と。

オルソン、ダンカン、クリーリーの三人が語った「歴史」に関する話題には、まだまだ紹介すべきものがあるが、どれも一考に値するものであることは述べておきたい。

### III. シンポジウムの成果

「歴史」について考える時に、オルソンは『マクシマス詩篇』においても、『ミュソロゴス』第二巻「詩と真実」(“Poetry and Truth”)においても、ヘロドトスを引合いに出す。自らの足で歩き回って調べ、その結果を語る人が「歴史家」なのだと言うのである。他人の報告を聞いて、叙述する人をオルソンは歴史家とは認めない。「歴史について」のシンポジウムでも、同じ趣旨でヘロドトスへの言及はなされている (*Muthologos* I, 3)。

われわれが読解した「場所、あるいは名前」と最も近い考え方としてシンポジウムの際に紹介されたのは、「歴史は時の記憶」(“History is the memory of time”)というキャプテン・ジョン・スミス (Captain John Smith) の言葉である (15)。これは『マクシマス詩篇』のタイトルにもなっている重要な言葉である。ギンズバーグは、この言葉を聞いて「それなら、歴史は単なる記憶ではないか」(“It [history] is merely a memory”)と反論し、オルソンに「ああ、だがわれわれの記憶なんだ」(“Yeah, but it is *our* memory.”)とたしなめられている (15)。

オルソン、クリーリー、ダンカンが「歴史」を核にして、互いの創作を刺激し合うとともに、話題にした事柄に関する意見を整理して考えを深めたことは間違いない。この三人からギンズバーグとホエーレンは学ぶところが多かったと思われる。しかし、「歴史について」のシンポジウムは、パネリストとなった五人の詩人を刺激しただけではなかった。

聴衆の側から4度、オルソンに向けて歴史に関する質問がなされている。サミュエル・ヒューストン (Samuel Houston) がアラモ砦 (the Alamo) に残ったかどうかについて (11)。ヘロドトスの歴史はそれほど重要なものか (11)。一個人は歴史に対して責任があるかどうか (14)。シンバット橋 (Cinvat Bridge) のことを聞いて、それはテミス (Themis) と同じことか (16) 等の4種類の質問である。

オルソンが様々なトピックについて語りながら、どのような質問が投げかけられても、意味深い答をするので、聴衆の側としても安心して質問できたのだと思われる。こうして、オルソンは、モードが指摘していたように「夏のコミュニティ造り」に成功したのだが、同時に、「歴史」についての興味を聴衆に喚起することにも成功したと言えよう。それは、オルソンが『マクシマス詩篇』の語り手マクシマスに近づいて行く場でもあった。

### 註

- 1) “lands haft” の “haft” を廃語となった OED の語義 “to locate, to fix,” “to establish itself,” “to set a plant firmly, fix, root,” “establish, settle” を適用して解釈すれば, “lands haft / experience” は「土地



は経験を／樹立する」となる。しかし、同じ詩を再度朗読している箇所(17)を見ると“landschaft / experience”となっている。改訂第二版『ミュソロゴス』も、オルソン著『散文全集』(Charles Olson, *Collected Prose*. Ed. Donald Allen and Benjamin Friedlander. Berkeley: University of California Press, 1997)の200頁においても“landschaft / experience”である。本稿では、この箇所を“landschaft / experience”から“c”が落ちた結果生じたタイプミスと考える。

2)「時空世界」と訳出した“space-time”は、三次元の空間に時間を加えて作られた四次元の連続体。

3)「組織学」(“histology”)は、生物の組織の構造・発生・分化などを研究する。

### 参考文献

- Jung, C. G. *Symbols of Transformation: An Analysis of the Prelude to a Case of Schizophrenia*. Trans. R. F. C. Hull. Second Edition. Princeton: Princeton University Press, 1967.
- Olson, Charles. *Collected Prose*. Ed. Donald Allen and Benjamin Friedlander. Berkeley: University of California Press, 1997.
- Olson, Charles. *The Maximus Poems*. Ed. George F. Butterick. Berkeley: University of California Press, 1983.
- Olson, Charles. “On History” *Muthologos: The Collected Lectures and Interviews*. Volume I. Ed. George F. Butterick. Bolinas, California: Four Seasons Foundations, 1978. 1–19.
- Olson, Charles. *Muthologos: The Collected Lectures and Interviews*. Volume II. Ed. George F. Butterick. Bolinas, California: Four Seasons Foundations, 1979.
- Olson, Charles. *Muthologos: Lectures and Interviews*. Revised Second Edition. Ed. Ralph Maud. Vancouver: Talonbooks, 2010.
- 中村 元『決定版 中村元選集 第9巻 ウパニシャッドの思想』春秋社, 1990年。
- 湯田 豊『ウパニシャッド—翻訳および解説—』大東出版社, 2000年。